労協連だより

田嶋　康利

労協連は、さる２月28～３月１日の両日、東京で「はたらくことは人を命につなぐこと、社会的孤立と排除に抗し、”ともに生きる”地域をつくる」をテーマに「全国よい仕事研究交流集会」を開催した。全国集会を、年明けより開催してきた全国15ブロックの地域別よい仕事集会の総集約と位置付け、当事者市民主体の「ともに生きる」地域づくりをどう進めるかを中心に、初日に山崎史郎氏（内閣官房ひとまちしごと創生本部地方創生総括官）を講師に「まち・ひと・しごと創生がめざす”ともに生きる”地域づくり」をテーマにした記念講演、また「人を命につなぐ仕事おこし－地域循環型産業への挑戦」、「社会的困難を抱える仲間とともに働き、ともに生きる地域をつくる」をテーマにした２つのパネルディスカッションを開催した。２日目は、全国の現場から提出された「よい仕事」実践レポートを基に16の分散会を行い、協同総研の会員・研究者の皆さんにコメンテーターをお引き受けいただいた。この場をお借りして感謝申し上げます。

集会は、現在私たちワーカーズコープが2015年度の事業運動の最大の焦点として位置づけている２つの課題、「生活困窮者自立支援制度」、またF（フード）・E（エネルギー）・C（ケア）が地域で自給循環するコミュニティ経済の創造に向けて、どう地域づくりを進めていくか、に対応したものである。

初日ディスカッションでコメンテーターをお引き受けいただいた厚生労働省社会・援護局生活困窮者自立支援室の方より、「ワーカーズコープは日本の社会資源になるのではないかと思う。皆さんの実践のノウハウを地域の中で展開してもらえれば、制度は大きく変わっていく」、「私は昨年末、宮城県大崎市でワーカーズコープの生活困窮者支援モデル事業の報告を聞いて感動した。こんな人材がいるのかと。それは、『私たちは困窮者支援の事業（就労準備支援）を受託したけれど、この地域のことはよく知りません。だから、だれに聞けばよいのか、どこを訪ねればよいのか、を聞きながら地域の社会資源を開拓しています』と。今日の報告もそうだが、地域と一緒にやっていこうとする姿勢に感動した」と、私たちに対する期待と共に過大なる評価もいただいた。

私たちは、本年４月に開始される生活困窮者自立支援制度を焦点に、「当事者主体」「市民の制度参加」「地域づくり」「仕事おこし」の立場に立ちきり、「まち・ひと・しごと創生」や、地域循環型産業の創出と結んで、困窮者支援の運動事業に全面的に取り組んでいく。それは、地域で最も困難を抱え、苦労している人びとととともに働き、仕事をおこし、支え合える地域をつくること、制度から投げ出される軽度の高齢者を地域で受け止め、活躍の場をつくること、貧困の連鎖を断ち切り、どの子どもも主人公とな

れる豊かな体験や学びを通じて元気に育つ地域をつくることが、今、市民社会にとって最も重要な取組みだと考えるからである。現在、20の自治体から、相談支援、家計相談、就労準備支援、学習支援などの事業を受託することになった（３月10日時点）。

成長経済とそれを支えてきた福祉国家の破綻的事態の中で、市場や国家は貧困や格差拡大、孤立など社会的矛盾の解決主体には、もはやなり得ない。人を生命につなぐような働き方を広げ、人と人、人と自然がつながれる地域社会を、市民自身が力を合わせて足元の地域につくることが求められている。